令和６年度　名古屋市教育委員会　報告第３号

「今後の不登校施策に関する有識者等会議」の報告について

（令和６年７月２６日提出　新しい学校づくり推進部　新しい学校づくり推進課）

名古屋市における不登校に係る方策

名古屋市における取組等

▸令和４年３月　名古屋市教育委員会

不登校未然防止及び不登校児童生徒支援の方策

目標　「不登校児童生徒が減少すること」
「不登校児童生徒が自らの進路を選択し、卒業後の未来を開くことができること」

8つの方策

① 魅力ある学校づくり
② 教職員の意識改革
③ なごや子ども応援委員会・学校と専門機関等との連携
④ 校内の教室以外の居場所づくり
⑤ 訪問相談対面指導 アウトリーチ支援
⑥ 教育支援センターの拡充
⑦ 民間団体（施設）との連携
⑧ ICTを活用した学習支援

今後の不登校施策に関する有識者等会議

＜目的＞
令和４年３月に本市が策定した「不登校未然防止及び不登校児童生徒支援の方策」に基づく取組を継続しつつ、誰一人取り残されない学びの保障に向けた新たな支援施策についてご意見をいただく

＜委員＞

坪井　裕子	名市大教授	尾関利昌	市小中PTA協議会会長
伊藤美奈子	奈良女子大教授	原　和輝	市立八王子中学校校長
茨木　泰丈	教育開発研究所理事	河上賢太	市立大森中学校教諭
横井　裕人	市教委事務局　新しい学校づくり推進部部長		

有識者等会議（全7回）
R2.12～R3.9

方策策定
R4.3

方策を踏まえた取組
R4年度
R5年度

有識者等会議立ち上げ
R6.5

R6年度

＜不登校児童生徒＞
小中学校　29万9,048人（過去最多）

▸令和５年３月　文部科学省

誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策(COCOLOプラン)

不登校によって学びにアクセスできない子どもをゼロにすることを目指し、社会全体で取組を進めていく

▸令和５年10月　文部科学省

不登校・いじめ緊急対策パッケージ

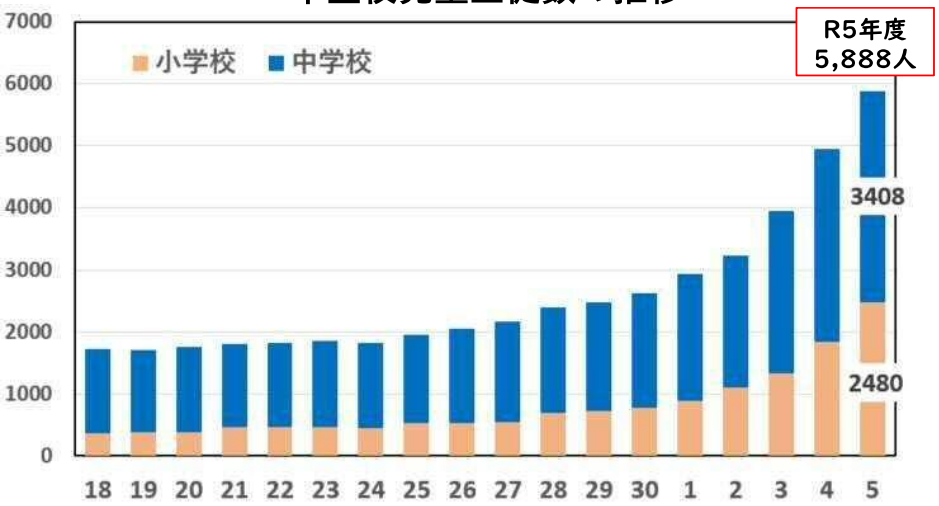
COCOLOプランを前倒しして取り組むなど、「誰一人取り残されない学びの保障」に向けた取組の緊急強化が必要である

国の動向等

不登校児童生徒の現状　名古屋市

「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」より

不登校児童生徒数の推移



令和４・５年度　学年別不登校児童生徒数の推移

学校内外で相談・指導等を受けていない児童生徒数・割合の推移

- 全国的な傾向とほぼ同じ
- 増加の一途をたどっている
- 増加率は小学生が高い
- 中学校入学後、新規が増加
- 学校内外で相談・指導等を受けていない児童生徒　2,574人

長期欠席者の現状　名古屋市

「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」より

小学校

学年	病気	経済的理由	その他	不登校	（不登校のうち）					合計
					前回も計上	50日以欠席上	90日以上欠席	出席10日以下	出席0日	
1年	119	0	114	**199**	－	108	52	3	1	**462**
2年	125	0	151	**285**	99	163	87	18	6	**561**
3年	117	0	148	**350**	142	199	122	16	6	**615**
4年	137	0	149	**430**	185	253	170	39	12	**716**
5年	123	0	120	**535**	251	324	212	47	25	**778**
6年	171	0	239	**681**	344	442	313	54	22	**1.091**
計	**792**	**0**	**951**	**2,480**	**1,021**	**1,489**	**956**	**177**	**72**	**4,223**

中学校

学年	病気	経済的理由	その他	不登校	（不登校のうち）					合計
					前回も計上	50日以欠席上	90日以上欠席	出席10日以下	出席0日	
1年	175	0	60	**932**	421	692	466	52	23	**1,167**
2年	215	0	63	**1,238**	749	963	691	122	63	**1,516**
3年	166	0	31	**1,238**	979	1,020	740	121	61	**1,435**
計	**556**	**0**	**154**	**3,408**	**2,149**	**2,675**	**1,897**	**295**	**147**	**4,118**

不登校児童生徒について把握した事実　名古屋市

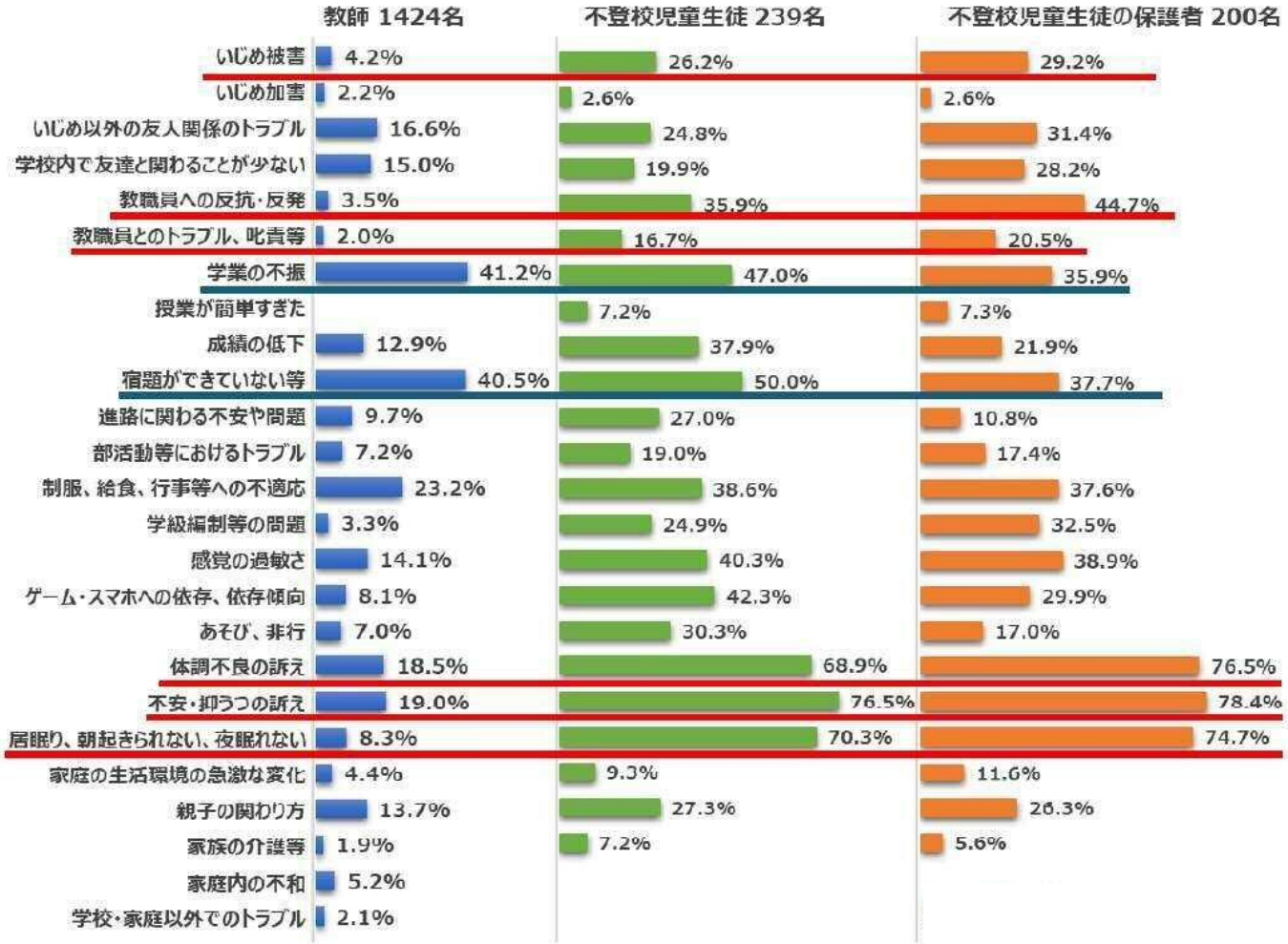
「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」より

校種	区分	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
		いじめの被害の情報や相談があった	いじめ被害を除く友人関係をめぐる問題の情報や相談があった	教職員との関係をめぐる問題の情報や相談があった	学業の不振や頻繁な宿題の未提出が見られた	学校のきまり等に関する相談があった	転編入学 進級時の不適応による相談があった	家庭生活の変化に関する情報や相談があった	親子の関わり方に関する問題の情報や相談があった	生活リズムの不調に関する相談があった	あそび 非行に関する情報や相談があった	学校生活に対してやる気が出ない等の相談があった	不安・抑うつの相談があった	障害(疑い含む に起因する特別な教育的支援の求めや相談があった	個別の配慮(13以外 についての求めや相談があった
小	把握した事実(複数回答可)	18	219	102	232	54	74	113	414	362	111	1133	518	82	105
中	把握した事実(複数回答可)	10	465	51	469	83	94	111	278	508	304	1629	685	140	100

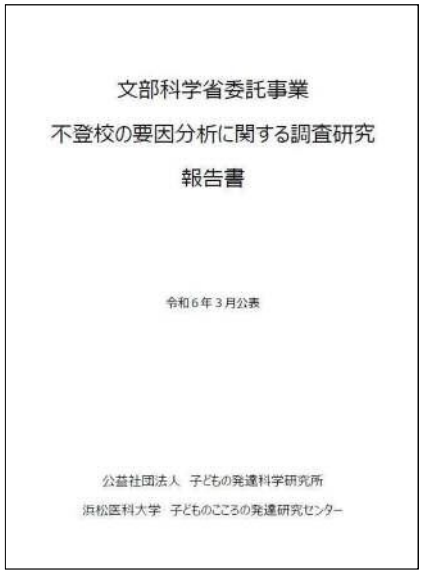
文部科学省委託事業　**不登校の要因分析に関する調査研究報告書**

R6.3月公表　公益社団法人　子どもの発達科学研究所
浜松医科大学　子どものこころの発達研究センター

きっかけに関する教師・児童生徒・保護者の回答の比較



赤：差があった項目
青：概ね一致した項目


文部科学省委託事業
不登校の要因分析に関する調査研究
報告書

令和6年3月公表

公益社団法人　子どもの発達科学研究所
浜松医科大学　子どものこころの発達研究センター

不登校の要因について、
教員・児童生徒・保護者の認識に開きがある

会議の概要と予定

（2024年7月19日　現在）

有識者等会議

＜目的＞

令和４年３月に本市が策定した「不登校未然防止及び不登校児童生徒支援の方策」に基づく取組を継続しつつ、**誰一人取り残されない学びの保障**に向けた新たな支援施策についてご意見をいただく

第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回
5/24	6/21	7/16	9/9	10月中旬	11月中旬

会議のまとめ

新たな施策（案）作成

所管事務調査（常任委員会による審議）

パブリックコメント

教育委員会会議

施策策定　令和６年度末予定

＜検討内容（予定）＞

第４回

Ⅱ　多様な教育機会の確保
- ○　なごや子ども応援委員会・学校と専門機関等との連携
- ○　訪問相談、対面指導、アウトリーチ支援

Ⅲ　保護者支援・学校外の専門機関等との連携
- ○　保護者への支援

第５回

Ⅲ　保護者支援・学校外の専門機関等との連携
- ○　公的機関との連携
- ○　民間団体(施設)との連携

総括に向けて
- ○　その他有効な不登校児童生徒支援

第６回

これまでの議論の振り返り
- ○　検討事項総括、報告書案検討

今後の不登校施策のあり方についての基本的な考え方

「児童生徒一人一人の思いや願いを尊重し、全ての児童生徒に多様な学びの場を確保すること」
「児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて社会的に自立できること」を目指す

Ⅰ　子どもたちが行きたくなる学校づくり

① 魅力ある学校づくり

② 教職員の意識改革

ナゴヤ学びのコンパス

Ⅱ　多様な教育機会の確保

8つの方策

③ なごや子ども応援委員会・学校と専門機関等との連携

④ 校内の教室以外の居場所づくり

⑤ 訪問相談対面指導 ｱｳﾄﾘｰﾁ支援

⑥ 教育支援センターの拡充

⑧ ICTを活用した学習支援

ア 学びの多様化学校の設置

イ 夜間中学における不登校学齢生徒の受入

ウ 高等学校等の生徒を含めた支援

Ⅲ　保護者支援・学校外の専門機関等との連携

⑦ 民間団体（施設）との連携

エ 保護者への支援

オ 公的機関との連携

第１回会議（５月２４日）　今後の不登校施策のあり方についての基本的な考え方

不登校は問題行動ではない

　不登校は、取り巻く環境によっては、
どの児童生徒にも起こり得るものとして捉え、
不登校というだけで問題行動であると受け取られないよう配慮し、
児童生徒の最善の利益を最優先に支援を行うことが重要である。

　不登校児童生徒が行う多様な学習活動の実情を踏まえ
個々の不登校児童生徒の状況に応じた必要な支援が行われることを求められるが、支援に際しては、
　登校という結果のみを目標にするのではなく、
児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、
　社会的に自立することを目指す必要がある。

　なお、これらの支援は、不登校児童生徒の意思を十分に尊重しつつ行うこととし、当該児童生徒や保護者を追い詰めることのないように配慮しなければならない。

義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する基本指針
（平成29年3月31日　文部科学省）

本市　ホームページ

○　『不登校は問題行動ではない』ということを、議論の大前提とすることを改めて確認した。
○　不登校の児童生徒が置かれている状況や環境を「問題」と考え、それらを解決していく。
○　児童生徒が休養して落ち着きを取り戻し、学びたいと思った時に多様な学びにつながることができるようにする。

第１回会議（５月２４日）　Ⅰ　子どもたちが行きたくなる学校づくり

①
魅力ある学校づくり

○　ナゴヤ・スクール・イノベーション事業の推進
⇒　**「子ども一人一人の興味・関心や能力、進度に応じた個別最適な学び」を、全ての児童生徒に提供する。**

○　「ナゴヤ学びのコンパス」が目指す教育、重視したい学びの姿の実現
⇒　**ナゴヤ学びのコンパスを基にして、全ての子どもが自分らしく、幸せに生きていくために、「子ども中心の学び」を幼児期から青年期まで一貫して大切にした教育を進める。**

＜ご意見等＞
・方向性には賛同する。一方で陰で支える力や支援が教職員には求められる。一人ではなくチームで協働して進めていけるものに。
・幼少期から子どもが感じ考える時間を大切にしたい。大人が関与しすぎないことも重要である。
・物の整備、教職員の対話の時間の確保が必要。
・理念はよいが、先生たちは大変だろうなと感じる。
・子どもたちが学校にとどまり続けていられる一番の理由は、学校という社会の中で友達や先生から愛着（信頼関係や自分が大事にされているという感覚）をシャワーのように毎日浴びることだろうと思われる。そのためには、互いにサポートし合う関係の中で学ぶ活動・仕掛けを用意する必要がある。

②
教職員の意識改革

○　「ナゴヤ学びのコンパス」の大人が大切にしたいことの浸透と教職員研修の充実
⇒　**児童生徒は「一人一人違う存在」であり「違っていてよい存在」である。児童生徒は有能な学び手であるという子ども観に転換し、教職員が児童生徒一人一人に寄り添った伴走支援をすることができるようにするとともに、不登校に関連する研修の充実を図る。**

○　チーム学校による教育的、心理的、福祉的取組で組織的支援の推進
⇒　**教員の視点のみならず、SCやSSW等によるアセスメントにより、児童生徒の実態を的確に把握し、組織的な支援体制を整える。**

・研修はしっかりやれていると感じる。
・エネルギーの低い子の中にはチャレンジに辿り着けない子もいるのではないか。存在するだけでいいんだよという見方もあると救われる子もいるのではないか。
・コンパスでは「自分なりの」チャレンジとしている。
・必要なときに他者に頼っていい、助けてと言える、これも社会的自立だと考える。
・学校を空けて学校外で行われる研修に参加するのはなかなか難しい（とりわけ40人学級の担任は）。限られた時間の中で教職員は研修や対話をしてきている。
・要因の認識に開きがあることが問題ではなく、違って当たり前、知ることからスタートなのではないか。
・コンパスの考え方を支える「理論」と「指導手法」を十分に教職員が身に付けられる仕組みづくりが大切。

全ての児童生徒にとって学校が楽しく、安心して学習・生活できるような「行きたくなる学校づくり」を目指すことは、不登校及び不登校傾向の児童生徒を生じにくくさせる上で非常に重要である。

第２回会議（６月２１日）

Ⅱ　多様な教育機会の確保

ア 学びの多様化学校の設置

○　市立学びの多様化学校の設置について　（※中身については別会議で議論する）

⇒　**多様な教育機会の確保として、柔軟で弾力的な教育課程を編成した「市立学びの多様化学校」を設置する意義はある。**

・名古屋に二つ目の学びの多様化学校が必要なのか、分析が見えないところがある。
・子ども側が自分が学びたい場所を選べるようにすることが理想的。従来からあるものとこれからつくるものに特徴がそれぞれあるとすれば必要。
・一つの学校をつくって終わりでなく、そこで学んだ先生の人事異動や研修によって市全体として多様な学びをどの学校でも提供できるようになることが理想的。
・携わる先生方の研修や情報共有、サポートする体制が非常に重要である。
・多様な教育機会の確保として、柔軟で弾力的な教育課程を編成した「市立学びの多様化学校」を設置する意義はある。一方で、市立として立ち上げる場合、内容がかなり多岐に渡るため、ここだけの場で決めるのは難しい。別の場で議論すべき。

④ 校内の教室以外の居場所づくり

○　中学校全校設置

⇒　**市立中学校110校での全校設置を進めていく。**

○　小学校での支援を実施

⇒　**小学校段階の特徴を踏まえた支援のあり方や方向性、設置の仕方（場所、人員、環境整備など）を改めて整理し、取組を進めていく。**

・当初は、教員の中にも学校にこれをつくることに疑問をもつ意見もあったが、実際に始めてみると、その意義について理解が得られている。
・小学校でのつまづきが中学校の不登校という形で出てくる生徒も多い。中学年(九歳、十歳の壁)ぐらいでつまずく子どもに対して早めに支援することが重要。
・まずはモデル的にやってみることや、通級が相応しいのか居場所が相応しいのかをきちんとアセスメントできる体制をつくることが重要。
・居場所をつくるとともに、どのような人を配置するかも重要で、資金面や内容をしっかり検討する必要がある。
・小学校では柔軟に対応できる力量のある人が必要。不登校の背景には家庭問題や友人関係の問題などがあり、これらに配慮できる経験をもった教員が必要。

⑧ ICTを活用した学習支援

○　オンライン学習プログラムによる学習支援の継続

⇒　**オンライン学習プログラムによる学習支援を継続する。また、学級担任などが児童生徒の学習状況を定期的に確認･把握し、児童生徒の支援等に活かしていく。**

○　メタバースを活用した支援の実施

⇒　**メタバースを活用した支援の実証事業の成果と課題を明らかにし、不登校児童生徒の個々の実態に応じた支援の拡充を図る。また、仮想世界と現実世界とをつなぐ取組、リアルでの対人関係の構築につながる取組などについては研究していく。**

・オンライン学習プログラムは、学校と教育支援センターで委託業者が異なる。子どもや保護者等からすると同じIDが使えるシームレスな環境が望ましい。
・メタバースで画面の向こう側で生じる子どもの安全管理は非常に難しい。導入は責任もセットで生じる。リスクマネジメントやルール設計を考える視点は重要。
・ネットでの相談は対面に比べて少ないが一定数いる。その子たちの特性として、ネット以外の相談相手をもっている子に比べてリスクが高い印象がある。リスクを抱えがちな子が来る可能性は高いため、それを踏まえて相談員の配置が不可欠。

第３回会議（７月１６日）

Ⅱ　多様な教育機会の確保

イ 夜間中学における不登校学齢生徒の受入

○　夜間中学における不登校学齢生徒の受入

⇒　**多様な学びの場の一つとして活用していくことについては、令和７年度開校後、夜間中学の運営状況や全国的な動向も踏まえて、引き続き検討していく。**

・多様な学びの一つとして運営状況も踏まえ引き続き検討していくことには賛同する。歳の離れた異年齢交流により、自己肯定感が高まることも期待したい。
・在籍したまま環境を変えることや起立性調節障害の生徒にとってはメリットがある。
・全国的に学齢期生徒の受入を行っているところに、どのような成果と課題があるかも踏まえて進めていくとよい。
・通学の安全面など、開校後、様々な視点から受入体制については整理する必要がある。
・笹島学区は星槎中学校が近くにある分、不登校生徒に対する受入について理解があると感じる。受入を行うのであれば地域への説明も丁寧に進めてほしい。

⑥ 教育支援センターの拡充

○　社会的自立に資する支援を充実

⇒　**集団生活への適応、情緒の安定、基礎学力の補充、基本的生活習慣の改善を図るため、ＩＣＴ・通信環境の整備を進め、児童生徒の社会的自立に資する支援を充実していく。**

○　本市の拠点として機能を拡充

⇒　**学校内外の専門機関や関係者、多様な学びの場とのつながりを深め、切れ目ない支援を推進するための相互連携を図る本市の拠点としての機能を拡充する。**

・学校と同じようにICTを活用することで、学校復帰につながっていく部分もあるのではないか。
・名古屋にはハートフレンドなごやとフレンドリーナウの２つがあることが特長。その特長を活かしながら、横のつながりと縦のつながりを充実させていく。
・ハートフレンドとフレンドリーナウを１つにすることは難しい。この２つや他の支援施設も含めて結び付けるハブ的機能が必要なのではないか。
・子どもを深く理解することが出発点。情報が時系列で共有されること、「できないこと」より「得意なこと」「うまくいったこと」が引き継がれていくことが大切。
・支援員や専門職として常勤の心理士などの人的配置や力量を高めるサポート体制が必要。

ウ 高等学校等の生徒を含めた支援

○　柔軟で質の高い学びの保障

⇒　**教師と生徒をWeb会議システムでつないで教室の授業を配信し、同時双方向型の遠隔授業を行い、単位認定につなげる。**

⇒　**市立高校における学校の枠を越え、在籍する学校以外の授業等を対面やオンラインで受講可能にする。**

・市立高校が全体として「こうなりますよ」と伝達・情宣できるとよい。
・心理的にクラスに居ることが辛くなった生徒など不登校の要因によっては、遠隔授業が効果的でない場合もあるのではないか。
・不登校生徒の遠隔授業だけでなく、市立高校の学校の枠を越えた学びがあるのがよい。市立高校の学校の枠を越えた学びについては率直に面白いと感じる。
・全ての不登校生徒に対応するわけではないが、名古屋市立１５校だからこそできる取組である。
・コロナ禍の中、大学でハイブリッド授業を行ったが大変であった。高校の先生方も大変ではないか。先生方への配慮や支援、サポートを考えていく必要がある。